



## 〈母の教え、僕の道〉

ジャーナリスト  
松本侑壬子

フランス最高の文学賞を二度も受賞した文豪ロマン・ガリ（一九一四―一九八〇）の自伝の映画化である。ガリは、ポーランド系ユダヤ人移民として筆舌に尽くせぬ苦難の末に、フランスで軍人となり、第二次世界大戦後は作家、外交官、映画監督、また有名女優の夫など多彩な顔を持ち、最後は拳銃自殺を遂げた。その波乱万丈にして数奇な人生は、幼少期からの母親との強い絆と分かちがたくつながっている。

一九五〇年代半ば、作家になったロマン（ピエール・ニネ）が頭痛に苦しみながら原稿を書きあぐねている。『夜明けの約束』と題する<sup>まかほ</sup>母についての本で、記憶は幼少期に遡る。一九二四年、ポーランドの冬。雪道を学校から元氣なく帰ってくるロマンを待ち受けている母ニナ（シャルロット・ゲンズブール）。「先生たちはわかってない。お前は将来、大作家になる。フランス大使にな

る」と、呪文のように自信ありげに叫ぶ。貧しい母子は、街ではさげすまれ、物笑いの種になるが、馬鹿にされればされるほどニナは怒りと復讐心に燃えて、闘争心を掻き立てられる。彼女の拠り所は愛するロマン。ロマンはニナの人生のすべてだ。

フランスを理想化するニナは、南仏ニースに移り、高級ホテル内での仕事を始め、高校を出たロマンは、パリの大学へ。そこで絵を描く楽しさを知るが、ニナは「画家になっても、ゴッホのように死んでから有名になったのでは意味がない」とロマンに絵を禁じ、「お前はトルストイになる、V・ユゴーになる」と文学への道へと後押しする。学生時代に書いた短編小説が新聞に掲載され、一層作家活動に精を出すロマンは、翌年二一歳でフランス国籍を取得、さらに二四歳でフランス空軍に入隊し母を喜ばせた。

ロマンには反抗期というものがないのか。自由すらないのでは？いや、この母子は絶対の信頼で結ばれているのだ。ニナは、何があっても息子を愛すると約束、無条件で完全に彼を支える、と。ロマンのお返しは、母の夢に成功して有名になること、を叶えるために奮闘努力することなのだ。現実が厳しければ厳しいだけ、ふたりは力を合わせて壁を乗り越える。力関係は一方通行、母の意向は絶対だ。たとえ無理難題の押し付けでも、母がそれを望んでいるのなら、息子はそのために全力を尽くす。母の夢は、息子のため。まるで、ふたりは一人なのだ。

一九三九年、第二次世界大戦が始まり、同時期にニナは入院する。見舞いに来たロマンに「小説を書き続けなさい」と励ます母。その後の五年間、前戦のロマンに毎週ニナからの手紙が届く。手紙に叱咤激励されて奮闘するロマン。ついに英国での出版が決まり、吉報はすぐに母の元へ。だが…。

ところで、ニナのような母親をもつことは、祝福なのか呪いなのか？ロマンを演じたニネは、「彼を比類ない人物にしたのは、彼の母親。僕らはみんな母親から受け継ぐ。それはいい面もあるが、つらい面もある」と複雑だ。



### 『母との約束、250通の手紙』

フランス・ベルギー映画(131分)

監督：エリック・バルビエ

出演：ピエール・ニネ、シャルロット・ゲンズブール、ディディエ・ブルドンほか

1月31日(金)より、新宿ピカデリーほか全国順次公開

©2017-JERICO-PATHE PRODUCTION-TFI FILMS PRODUCTION-NEXUS  
FACTORY-UMEDIA